

児童の自己肯定感を育む学習指導の在り方

— 書くことに重点を置いた対話的な学習の工夫を通して —

坂町立横浜小学校 西村 洋司

研究の要約

本研究は、児童の自己肯定感を育む学習指導の在り方について考察したものである。所属校第4学年児童は、「自分のよい所が言えない」「漠然とした不安を抱え、登校をしぼる」「自信がなく、なかなか主体的に自分の思いを伝えられない」などの実態がある。このような実態から、児童の自己肯定感に課題があることが分かり、自己肯定感を育む手立てが必要であると考えた。文献研究から、対話的な学習及び書く活動は、児童の自己肯定感を育むことに有効であることが分かった。また、コロナ禍の現在、対話的な学習の一つとして書く活動は意義があることが分かった。そこで、書くことに重点を置いた対話的な学習の工夫を追究し、授業を行った。その結果、書くことに重点を置いた対話的な学習の方法を示すことができ、この方法は、児童の自己肯定感を育むことに有効であることが分かった。

I 主題設定の理由

中央教育審議会（平成29年）は、「資料3-2 自己肯定感を高め、自らの手で未来を切り拓く子供を育む教育の実現に向けた、学校、家庭、地域の教育力の向上（教育再生実行会議第十次提言）」（以下、「第十次提言」とする。）において、子供たちの自己肯定感が低く、自分に対して自信がないままでは、これからの時代に必要な資質・能力を十分に育めたことにならないため、子供たちが自信をもって成長し、より良い社会の担い手となるよう、子供たちの自己肯定感を育む取組を進めていく必要があると示している。

船津徹（2020）は、これからのグローバル競争時代を生き抜くには、「チャレンジ精神」と「レジリエンス」の二つを兼ね備えていることが重要で、その土台となっているのが自己肯定感であり、自己肯定感が安定すると「チャレンジ精神」と「レジリエンス」も強くなり、さらに「勉強」「人間関係」が高いレベルで達成できるようになると述べている。

また、茂野賢治・岸田修成（2019）は、自己肯定感の醸成により自己指導能力が育成できると述べている。

所属校第4学年では、「自分のよい所が言えない」「漠然とした不安を抱え、登校をしぼる」「自信がなく、なかなか主体的に自分の思いを伝えられない」などの実態が見られる。

「第十次提言」では、自己肯定感が高い方が長所に関する意識が高いことを示している。

古荘純一（2020）は、自己肯定感が低いタイプの特徴として、「いつも失敗を恐れている」「先の見通しを明るく捉えられない」「自分に自信がない」などを挙げている。

これらのことから、所属校第4学年児童は、自己肯定感が低い状態にあると考える。

そこで、子供たちにこれからの時代に求められる資質・能力や生徒指導の目標である自己指導能力を付けていくためには、自己肯定感を育む取組を行っていくことが大切だと考え、本主題を設定した。

II 研究の基本的な考え方

1 自己肯定感とは

東京都教職員研修センター（平成24年）は、自己肯定感とは、「自分に対する評価を行う際に、自分のよさを肯定的に認める感情」¹⁾と示している。

田中道弘（2008）は、自己肯定感を「自己に対して前向きで好ましく思うような態度や感情」²⁾と述べている。

これらのことから、本研究では、自己肯定感を「自己に対して前向きで、自分のよさを肯定的に認める感情」と定義する。

2 自己肯定感を育む必要性

(1) 楽しい学校生活

小学校学習指導要領（平成29年告示）解説総則編は、「学校は、児童にとって伸び伸びと過ごせる楽

しい場でなければならない。児童一人一人は興味や関心などが異なることを前提に、児童が自分の特徴に気付き、よい所を伸ばし、自己肯定感をもちながら、日々の学校生活を送ることができるようにすることが重要である。」³⁾と示している。

中島輝（2019）は「自己肯定感という感情のエネルギーがあれば、日々の生活のなかで、『楽しい!』『大丈夫!』と思えることが多くなります。」⁴⁾と述べている。

川崎市子どもの権利委員会（2008）が行った、実態・意識調査では、自己肯定感の高い子供は、全般的に学校生活のストレスが低いことを示している。

田中道弘（2001）は、大学生を対象に調査をした結果、自己肯定感が高い被験者ほど、充実感や希望をもちながら生きていると述べている。

これらのことから、楽しく学校生活を送るということは、児童がストレスをあまり感じず、伸び伸びと安心して学校生活を送れることであり、自己肯定感を育むことで児童は楽しく、充実した学校生活を送ることができる考える。

(2) いじめや不登校の未然防止

文部科学省（平成25年）は、いじめ防止のための措置の一つに自己肯定感を育むことを示している。

佐賀大学・佐賀県教育委員会（平成22年）は、不登校対策のポイントの一つとして、自己肯定感を育む人間関係づくり・授業づくりを示している。

伊藤美奈子（2019）は、不登校の子供たちの自己肯定感は低いと述べている。また、いじめについても被害者だけでなく、加害者も心の中に自己肯定感の傷つきや歪みがあり、いじめはそれが誤った形で行動化されたものと捉えられ、人間関係における自己肯定感の低さを早期に発見し、対応することで、いじめそのものを予防する手立ての一つとなりうるのではないかと述べている。

これらのことから、自己肯定感を育むことは、いじめや不登校の未然防止につながると考える。

(3) 望ましい人間関係

東京都教職員研修センター（平成24年）は、調査研究から自己肯定感の高い傾向にある子供は、友人関係も良好であることが分かったと示している。

高田明和（2019）は、人が抱える悩みやトラブルの原因のほとんどは、人間関係だと述べている。不安や恐怖、緊張感が悩む人のほとんどは、「自分に自信がない」ことが原因だと述べている。人間関係の悩みを解決する万能の鍵が自己肯定感であるとも述べている。

これらのことから、自己肯定感を育むことは、児童の望ましい人間関係を築くことにつながると考える。

3 自己肯定感を育む対話的な学習

(1) 対話的な学習と自己肯定感のつながり

大久保雅司・橘田浩・神宮寺聡・小宮山隆・相川恵子（令和元年）は、主体的・対話的で深い学びの推進が生徒の自己肯定感を育むための一助になっていると述べている。

田村学（平成28年）は、対話には一人では生み出せなかった智慧が出たり、新たな知がクリエイトされたりするよさがあると述べている。

高垣忠一郎（2004）は、自己肯定感は、他者との関係の中に根ざして生じると述べている。

これらのことから、児童の自己肯定感を育むためには、他者と関わりをもたせる対話的な学習を行うことが必要であると考ええる。

(2) 対話的な学習

ア 「友だちとの対話」

東京都教職員研修センター（平成24年）は、学習を通して、友だちに「認めてもらった」「友だちに教えることができた」と友だちと学ぶよさを感じることができたとき、子供の自己肯定感は高まると示している。

静岡県総合教育センター（平成26年）は、自己肯定感を高める指導方法の工夫として、友だちと関わりながら学ぶことができる工夫を挙げている。

これらのことからペア学習・グループ学習・全体交流など、様々な学習形態を取り入れ、友だちと関わりながら学べるようにすることや、「教え合う」「共に考える」「よさを見付け合う」活動を通して、友だちと学ぶよさを感じさせることで自己肯定感を育むことができる考える。

イ 「教師との対話」

(7) 認める

岸英光（2010）は、認めるとは、主語が私で、気持ちを述べ、現実を認めるものと定義している。

古荘（2019）は、「自分を認められているという体験を積み重ねることで、『自己肯定感』が育っていく」⁵⁾と述べている。

石田勝紀（2018）は、認めることは、大げさに意識しなくても、誰でも、いつでも表現できるポジティブな行為であり、無理がないため、子供に真意が伝わりやすく、褒めることに比べると、相手への刺激が小さく、飽きられることも少ないので、子供の

自己肯定感を高めるには「いいね」などの認める言葉は最適であると述べている。

これらのことから、個別指導や全体指導の場面で認める声掛けを行うことは、児童の自己肯定感を育むことに有効であると考ええる。

(イ) 小さな成功体験

神谷和宏（2017）は、小さな成功の回数がそのまま自己肯定感の高さにつながり、自分のレベルにあった目標を確実に達成していくと「できる」という感覚を身に付けることができ、できなかったことができるようになった回数が重なれば自然に「できる」という意識が高まると述べている。また、子供の自己肯定感がなかなか高まらない理由として、教師がすぐ教えすぎることを挙げ、自己肯定感を高めるためには、自分で考え、自分で決め、自分で行動を起こし、周囲から評価されることが必要であると述べている。

これらのことから、個別支援の場面において、教師が児童と対話し、児童のよさやつまづいている状況を把握し、その児童に応じた支援を心掛け、小さな「できる」という成功体験を多く積み重ねていくことで児童の自己肯定感を育てていくことができると考える。

ウ 「自己内対話」

静岡県総合教育センター（平成26年）は、子供たちの自己肯定感は、学校生活や生活環境に大きく影響を受け、中でも授業で「分かった」「できた」という達成感を感じることは、とても重要であると示しており、自己肯定感を高める指導方法の工夫として、学習成果を自ら実感できる指導方法の工夫を示している。

東京都教職員研修センター（平成24年）は、自己肯定感を高める指導方法の工夫の一つとして、子供が自分の活動を振り返り、自分の成長に気付けるようにすることを示している。

鶴田清司・河野順子（2012）は、「対話の中には、授業中には声（音）としては現れない対話『自己内対話』がある。友達の発表を聞きながら納得したり、疑問を持ったり、考えが揺れたりし、無意識のうちに自分の中で対話している」⁶⁾と述べている。

梶田叡一（2017）は、教育場面においては、他者と対話することが、自己内対話へと深化、発展していかなければならず、自己内対話が真に実りあるものになるためには、他者との対話のあり方が大事な意味をもつと述べている。

これらのことから、他者との対話をした後に、自己内対話をさせ、自分ができるようになったことを自覚させたり、新たな自分の成長に気付かせたりすることで自己肯定感を育むことができると考える。

(3) 書くことによる効果

現状から今後の学習においても、口頭での対話的な学習には制約がかけられると考える。そこで、書くことに重点を置いた対話的な学習の工夫について追究することとした。

小学校学習指導要領（平成29年告示）解説国語編は、B書くこと第3学年及び第4学年の内容において「オ書くこととしたことが明確になっているかなど、文章に対する感想や意見を伝え合い、自分の文章のよいところを見付けること」⁷⁾と示している。

中島（2020）は、「書くこと」で自己肯定感が高まると述べ、その理由について表1のように述べている。

表1 「書く」と自己肯定感が高まる三つの理由

理由	内容
①書き出すことで考えが整理される (アウトプット効果)	書くことは、自分の中から思考をいったん取り出すことで、心に渦巻くネガティブな感情や、モヤモヤとした気持ちを吐き出すように紙に書くことで、頭の中にあるモヤモヤが整理され、今の自分に気付くことができる。
②可視化することで受け止めやすくなる (見える化効果)	自分のありのままの感情や、モヤモヤしていた気持ちを書き出し、客観的に見ることで、「ああ、私はこういう気持ちだったのか」と認識し、それを受け止めることで自己認識が深まり、自分を肯定的に捉えられるようになる。
③脳に記憶として定着し行動や考えを変えるきっかけになる (インプット効果)	書くという行為によって脳が刺激され、活性化し、注意を向けるべき大切なこととして認識し、記憶に深く定着する。さらに、書いた内容を目にすることで潜在意識に働きかけ、行動や考え方が変わるきっかけにもなる。

永谷研一（2016）は、書くことで、自分を客観的に見つめることができるようになり、できたことを書くことで自信が出てきて自己肯定感が高まると述べている。

これらのことから、書くことで自分の考えを言葉や図などの形として表現することができ、他者に自分の考えが見えやすくなる。それは、お互いの考えのよさを見付けやすくさせたり、自分のよさを把握しやすくさせたりすると考える。また、書くことで、自分のできるようになったことや成長がより深く記憶され、自己肯定感を育むために有効だと考え

る。

コロナ禍において三密を避ける意味で対話的な学習が難しくなっている。このことについて、田村（2020）は、「文字言語を活用した意見交換、授業の終末の丁寧な振り返りによる精緻化などを、この機会に充実させることができる⁸⁾」と述べている。

そこで本研究では、書くことを取り入れた対話的な学習の方法について追究することとする。このことで、児童の自己肯定感を育むとともに、コロナ禍における対話的な学習の工夫を示すこともできると考える。

Ⅲ 研究の仮説及び検証の視点と方法

1 研究の仮説

書くことに重点を置いた対話的な学習の工夫を行えば、児童の自己肯定感を育むことができるであろう。

2 検証の視点と方法

検証の視点と方法について、表2に示す。

表2 検証の視点と方法

検証の視点	検証の方法
書くことに重点を置いた対話的な学習を取り入れることで、自己肯定感を育むことができたか。	・検証授業の事前・事後における児童のアンケートの回答における比較・分析 ・児童の振り返り ・教職員への聞き取り

(1) アンケートの実施

自己肯定感を育むことができたかについては、佐賀県教育センター（平成30年）が作成した「あなたのよかところSAGAシート（自己肯定感チェックシート）」を4段階尺度法で行い、事前と事後の効果測定を行う。このシートは、「自分自身に関する自己肯定感」「友だちとの関係を通じた自己肯定感」を問う質問から構成されている。表3にアンケート実施日を示す。

表3 アンケート実施日

時	学級	実施日
事前	4年1組	令和2年11月20日
	4年2組	令和2年11月20日
事後	4年1組	令和2年12月15日
	4年2組	令和2年12月15日

(2) 児童の振り返りと教職員への聞き取りの視点

文献研究で明らかになった自己肯定感が高い人、

育まれた人の特徴を参考に検証する。自己肯定感が高まった姿・育まれた姿を、表4に示す。

表4 自己肯定感が高まった姿・育まれた姿

項目	高まった姿・育まれた姿
正直	・自分に対して正直になれる。（永谷）
自信	・やればできるという自信がある。（古荘）
前向き	・「できる」「だいじょうぶ」「やってみよう」「平気」などのポジティブな言葉をよく使う。 ・チャレンジ精神に富んでいる。前向きな気持ちになりやすい。（石田）
よさ	・自分のよさが分かり、自分の好きなこと、自分のやりたいことを見付けることができる。 ・他人を大切に思う。他人のいい所を認めることができる。（岸）
好き	・自分が好き。 ・できないことにとらわれない。（神谷）
人間関係	・友だちとの関係が良好。（東京都教職員研修センター）

永谷研一(2016), 古荘純一(2020), 石田勝紀(2018), 岸英光(2010), 神谷和宏(2017), 東京都教職員センター(平成24年) ※参考文献参照

表4を作成するために参考にした資料

Ⅳ 研究授業について

1 研究授業の内容

- 期 間 令和2年12月7日～令和2年12月15日
- 対 象 所属校第4学年（2学級49名）
- 単元名 「感動を言葉に」
- 目 標

【知識・技能】

・様子や行動、気持ちや性格を表す語句の量を増し、文章の中で使い、語彙を豊かにすることができる。

【思考力・判断力・表現力】

・詩に関する感想や意見を伝え合い、自分の詩のよい所を見付けることができる。

【主体的に取り組む態度】

・学習の見通しをもって、詩をつくり、積極的に他者の詩に対する感想を伝え合い、自分のよさを見付けようとする。

2 指導計画

本研究における指導計画を表5に示す。

表5 指導計画（全7時間）

時	学習内容
1	一行詩をつくる。
2	オノマトペを使った表現を考えたり、表現の工夫の仕方を見付けたりする。
3	比喩表現について知り、比喩を使った表現を考える。

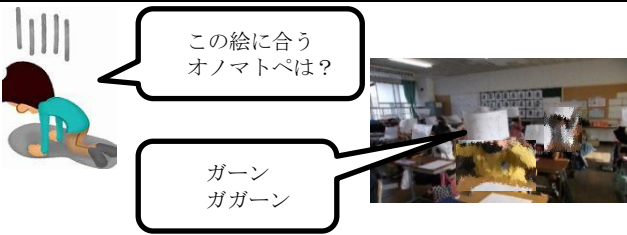
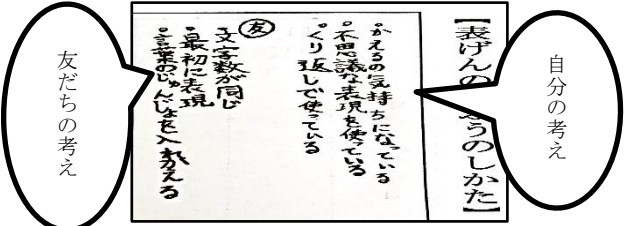
4	詩の題材を決め、題材から思い付く言葉を考える。
5	表現を工夫して詩をつくる。
6	詩を推敲する。
7	友だちの詩を読み合い、よさを伝え合う。

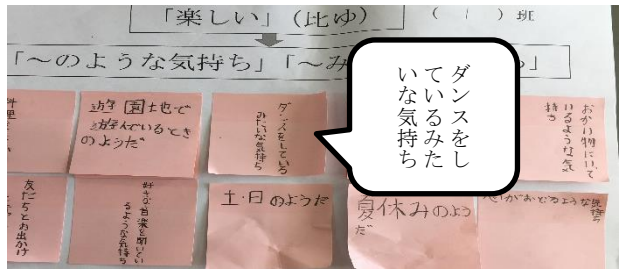
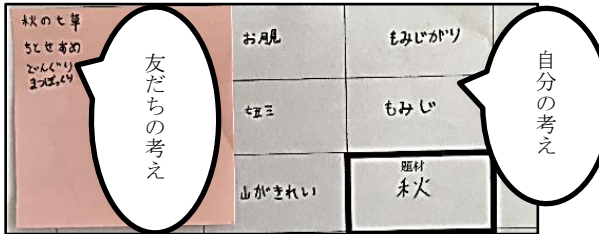
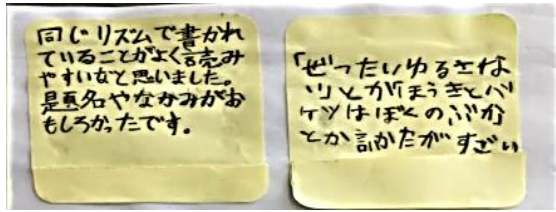
3 授業の実際と工夫

(1) 「友だちとの対話」(書くことを通した対話)

「教え合う」「共に考える」「よさを見付け合う」という活動を通して、友だちと学ぶよさを感じさせる対話的な学習を行った。表6に友だちと学ぶよさを実感させる工夫とポイントを示す。

表6 友だちと学ぶよさを実感させる対話的な学習の工夫とポイント

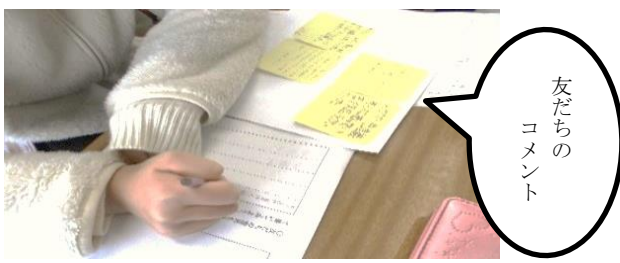
時	工夫	ポイント
1	全員の書いた一行詩を黒板に提示する。	- 友だちの作品から、今後の詩づくりに、自分が生かせる所を見付け、役立てる。 - 自分の作品を友だちに認めてもらう。 - 友だちの作品に共感する。
		
2	絵を見たり、音を聞いたりして、自分が思い付いたオノマトペを書き、一斉に提示させる。	- 自分の考えを友だちに認めてもらう。 - 同じ考えに共感する。 - 友だちと考える楽しさを味わう。
		
2	詩人の詩から表現の工夫を見付け、ワークシートに書き、友だちとワークシートを交換し、友だちの考えを書き加えさせる。	- 自分の考えが友だちの役に立つ。 - 友だちの考えから、新たな工夫があることを知り、役立てる。 - 同じ考えに共感する。
		

3	楽しい気持ちを表す比喻を考え、付箋に書き、お互いの考えをシートに貼り、グループで交流させる。	- 自分の考えを友だちに認めてもらう。 - 友だちの考えに共感する。 - 新しい比喻表現があることを知る。
		
4	詩の題材からイメージする言葉を書き、その後、友だちに付箋に書き足させる。	- 自分のアイデアが友だちの役に立つ。 - 友だちのアドバイスが役に立ち、自分のイメージが広がる。
		
5	つくった詩やつくりかけの詩を見せ合い、困っていることを共有し、アドバイスし合わせる。	- 友だちのアドバイスを役立てる。 - 自分のアドバイスが役に立つ。 - 新しい考えが浮かぶ。
	詩に使う表現に困っている友だちに対して 「つかれる」という言葉を最初使っていたけれど、しっくりこなくて、友だちに「心の中ではつかれている」にしてはどうかとアドバイスを受け、よいアイデアだと思ったので表現を変えた。 とけい 動きっぱなし 心の中では つかれている 人間と同じで いつか止まる 電池を入れたと また動く 人間と同じで	
6	グループの友だちの詩を読み、イメージしたことやよさを付箋に書き、ワークシートの裏に貼らせる。	- 自分の詩のよさを友だちに認めてもらう。 - 友だちから教えられ、自分の詩の新たなよさに気付く。
	「ぞうきん」という詩をつくった友だちへのコメント 	

(2) 「自己内対話」(自分の考えを再構成する)

研究授業では、「自分の考えをもつ」→「友だちとの対話」→「自分の考えを再構成する(自己内対話)」という流れで対話的な学習を行った。友だちとの対話をさせた後、毎時間、振り返りの時間を中心に自分の考えを再構成するための「自己内対話」を実践した。工夫例を表7に示す。

表7 自分の考えを再構成するための自己内対話の工夫例

工夫例	ポイント
付箋に書かれた友だちのコメントを参考にして改めて自分の詩のよさについて考え、ワークシートに書かせる。(第7時)	友だちが共感してくれたり、新たなよさに気付いてくれたりしたことを参考に自分の詩のよさについてまとめる。
	
毎時間の振り返りの視点として「授業で感じたこと・考えたこと」に加えて「できるようになったこと・分かるようになったこと」「自分のよさ」「友だちのよさ」の自己肯定感を育む三つの視点を示し、四つの視点の中から書ける視点で自己内対話をさせ、振り返りを書かせる。	「できたこと・分かったこと」や「自分のよさ」を視点に入れることで、意識させ、自分を肯定的に認められるようにする。 「友だちのよさ」に書かれていた児童には、教師が機会を見付け、個別に伝える。

(3) 「教師との対話」(児童の発言を認める声掛け)

教師は、全体指導や個別支援の場面で、「いいね。」「あっ、おもしろい。」「先生も一緒。」「そうなんだ。」「なるほど。」など、「感心」「理解」「共感」「興味」などをアイメッセージで伝え、児童の発言を認める声掛けを行った。

また、活動が進まない児童については、「ここまではできている。」と、児童がどこまでできているか、どこでつまづいているかを整理し、認めたり、解決方法を提示したりして、小さな成功体験を味わわせるようにした。対応例を示す。

- ・「詩に使う言葉は決めたんだね。」
- ・「題名を決めることはできているね。」
- ・「よく考えてるね。」
- ・「この言葉は面白いね。」
- ・「何をやったらいいか、よく分かっているよ。」

(例) 詩をつくる活動が進まない児童に対する声掛け
(第5時)

(4) 自分の考えをもたせる手立て

対話的な学習を効果的に行うには、最初に自分の考えをもつことが大切である。自分の考えをもたせられるよう今回行った手立てを示す。

- ・選択肢を用意する。
- ・児童の理解度に合わせた、児童がイメージしやすいヒントを出す。
- ・複数の答えが出る発問を設定する。
- ・考える負荷を少なくする。
- ・例やモデルを提示する。
- ・考える楽しさを味わわせ、考える意欲をもたせる。

自分の考えをもたせる手立て

V 研究授業の結果と考察

1 書くことに重点を置いた対話的な-を取り入れることで、自己肯定感を育むことができたか

(1) アンケートの結果と考察

自己肯定感について、「事前」「事後」を用いて検討した。結果を表8に示す。

表8 事前・事後アンケートの結果

構成	質問項目	事前	事後
自分自身	1 自分のことが好きだ	2.40	2.95
	2 自分の良い所を生かすことができる	2.90	3.15
	3 今の自分に満足だ	2.25	3.00
	4 自分の中にはいろいろな可能性がある	2.85	3.20
	5 自分の苦手なことを生かすことができる	2.75	2.80
	6 自分のことが大切だ	3.30	3.40
友だちとの関係	7 友達を信頼している	3.50	3.55
	8 友達の意見を素直に聞くことができる	3.05	3.25
	9 友達の役に立っていると思う	2.70	2.90
	10 友達から信頼されていると思う	2.60	2.90
	11 友達と一緒にいると安心できる	3.30	3.60
	12 友達に支えられていると思う	3.15	3.40

質問項目すべてにおいて肯定的な回答が増加した。その要因としては、次の四つが考えられる。

一つ目は、「自己内対話」である。毎時間、振り返りの時間を中心に「自己内対話」をさせ、児童に、自分について考える時間を保障した。そうすることで、他人を意識せずに、自分の納得したことや本音が書きやすくなったと考える。加えてそこに「できたこと」「自分のよさ」という肯定的な見方に視点を絞って自己内対話をさせたことで、児童は、自己に対する肯定的なイメージが向上したと考える。

また、「自己内対話」の内容を書き出すことで「自分の成長」や「自分のよさ」を深く記憶するこ

とができ、自己肯定感が育まれたと考える。

二つ目は、書くことを通した友だちとの対話である。書くことでお互いの考えが相手に伝わりやすかったり、普段あまり発言しない児童も自分の考えを表現したりすることができ、対話が深まった。そして、「共感してくれた」「友だちの役に立てた」「新しい見方ができるようになった」など、友だちと対話することで、自分の考えに自信をもったり、新たな自分のよさが発見できたりして、友だちとの関わりを通して、自分を肯定的に認められるようになったと考える。また、友だちとの相互理解も進み、友だちへの安心感や信頼感の醸成にもつながったと考える。

三つ目は、児童の発言を認める声掛けである。教師が、児童の発言やできていることを認めることは、児童に安心感や自信をもたせることにつながり、自己肯定感を育むのに有効だった。また、活動が進まない児童に、できている所までを気付かせ、認めることで小さな成功体験を味わわせていったことも、考える意欲をもたせ、対話的な学習を有効にしたと考える。書かせる活動は、教師が児童の考えを見とることに役立った。

四つ目は、「自分の考えをもつ」→「友だちとの対話」→「自己内対話」という流れで対話的な学習を進めたことである。「自己内対話」を深めるには、「自分の考えをもつ」「友だちとの対話」を充実させることが必要であると考えた。一方的に相手の話を聞くだけでは、対話が成立したとは言えず、考えをもたせる手立てを行ったことで、児童は自分の考えをもち、友だちとの対話に臨めた。考えがもてない児童にも「この考えは生かせそうだな。」など、教師と対話し、目的をもたせて「友だちとの対話」に臨ませた。

また、「友だちとの対話」を通して、自分の考えに共感されたり、新しい見方を知ったりすることで自分の考えをより確かにしたり、新たな考えが生まれたりする体験をさせることができたと考える。

最後に、「自己内対話」は、最初の自分の考えと比較したり、友だちの意見を参考にしたりして行うことで、児童に自己肯定感を育む対話的な学習になったと考える。

(2) 児童の振り返りと考察

研究授業後の児童の振り返りから、表4に示した自己肯定感が高まった姿・育まれた姿が多く見られた。振り返りの内容の一部を表9に示す。

振り返りからも、書くことに重点を置いた対話的

な学習の工夫をしたことで、児童の自己肯定感が育まれたと考えられる。自己肯定感が育まれた結果、自分や友だちを肯定的に認める言動が増え、学習に対して前向きな姿が多く見られるようになった。

このことは児童の人間関係を良好にし、楽しい学校生活を送ることにもつながると考える。

表9 自己肯定感が高まった姿・育まれた姿

児童の振り返り	項目
・ぼくは、正直な気持ちをなかなか言えなかったけど、この詩の勉強を通して、少し正直な気持ちを言うことができるようになりました。	[正直]
・わたしは、詩の学習をする前、あまり自分のことは好きではありませんでした。けれど、詩の学習を通して、自分には感じたことを詩にできるよさや人のアドバイスなどを素直に取り入れるよさなど、たくさんよさが発見できました。	[よさ] [好き]
・ぼくが成長したことは、思いついたことを書いたり、発表したりできるようになったことと自分のいいところが見つかるようになったことです。	[前向き] [よさ]
・友だちからアドバイスをもらって、詩をつくるのが楽しくなりました。	[前向き] [よさ]
・今後に生かせると思うのは、友だちと助け合うことができると思います。なぜかという、私のことを友だちがみてくれたり、ほめたりしてくれるからです。友だち関係にも自信がつかしました。	[自信] [人間関係]
・国語の授業以外でも友だちの意見を大切に、そこから自分の意見を広げることを生かしてみたいです。	[前向き] [よさ]
・〇〇君が「すごい」と言ってくれたので自信になりました。	[自信]
・いろいろなアイデアが出せてよかったと思います。もっと詩を書いてみたいと思いました。	[前向き]

(3) 教職員への聞き取りの結果と考察

研究授業後、教職員に聞き取り調査をした結果を次に示す。

・内面を素直に表現する楽しさを味わったことによって、その後の冬の俳句を書くときに、素直な気持ちを表現した作品が増えた。
・何かをしようとするときに、ゴールが明らかになると、粘り強く取り組むようになった。
・友だちのよさを認めるだけでなく、共に何かをしようとする姿や、友だちと活動する楽しさを見出せるようになった。
・指導者が、ゴールイメージを明らかにし、そのゴールに向けて、スモールステップで指導するが、その内容が児童主体で自他を認める場を意図的に仕組むことによって、児童は安心して学びに向かうことができる。

教職員への聞き取り

国語科の授業以外でも児童の言動に変容が見られた。例えば、友だちと積極的に関わる姿が多く見られるようになった。自己肯定感が育まれたことで自分だけでなく友だちのことも肯定的に認められるようになり、友だちとの良好な関係づくりにつながったと考える。

また、今回の授業では、詩をつくるまでに、一行

詩をつくらせたり、比喩で表現する体験をさせたりして、スモールステップで授業を進めてきた。そのことで児童に「できた」という達成感を味わわせる機会を多く与え、自己肯定感を育めたと考える。

教職員からの聞き取りにもあるように、ゴールイメージを明らかにし、スモールステップで指導していくことは、他教科でも活用できると考えられ、汎用性が高いものであると考える。

Ⅵ 研究のまとめ

1 研究の成果

児童の自己肯定感を育むことに有効な書くことに重点を置いた対話的な学習の工夫を示すことができた。

2 研究の課題

本研究を他教科でも追究・実践し、検証していく必要がある。

【引用文献】

- 1) 東京都教職員研修センター研修部教育開発課(平成24年):『東京都教職員研修センター紀要第11号』p. 6
- 2) 田中道弘(2008):「自尊感情における社会性, 自尊感情形成に際しての基準-自己肯定感尺度の新たな可能性」『自己心理学6 社会心理学へのアプローチ』金子書房.p. 36
- 3) 文部科学省(平成30年):『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説総則編』東洋館出版社.p. 96
- 4) 中島輝(2019):『何があっても「大丈夫。」と思えるようになる自己肯定感の教科書』SBクリエイティブ.p. 8
- 5) 古荘純一(2020):『自己肯定感で子どもが伸びる—12歳までの心と脳の育て方』ダイヤモンド社.p. 34
- 6) 鶴田清司・河野順子(2012):『国語科における対話型学習の授業をつくる』明治図書出版.p. 54
- 7) 文部科学省(平成30年):『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説国語編』東洋館出版社.p. 101
- 8) 田村学(2020):「ポスト・コロナショックにおける主体的・対話的で深い学びとカリキュラム・マネジメント」『ポスト・コロナショックの学校で教師が考えておきたいこと』東洋館出版社.p. 166

【参考文献】

- 中央教育審議会(第112回)配布資料(平成29年):『資料3—2 自己肯定感を高め、自らの手で未来を切り拓く子供を育む教育の実現に向けた、学校、家庭、地域の教育力の向上(教育再生実行会議第十次提言本文・参考資料)(1/2)』
- 船津徹(2020):『失敗に負けない「強い心」が身につく世界標準の自己肯定感の育て方』KADOKAWA
- 茂野賢治・岸田修成(2019):「子どもの自己肯定感の醸成を目指す生徒指導—教師の教育実践における行為の省察を通して—」『東京工芸大学工学部紀要人文・社会編42巻2号』

- 中央教育審議会(第112回)配布資料(平成29年):『資料3—2 自己肯定感を高め、自らの手で未来を切り拓く子供を育む教育の実現に向けた、学校、家庭、地域の教育力の向上(教育再生実行会議第十次提言本文・参考資料)(2/2)』
- 古荘純一(2020):『自己肯定感で子どもが伸びる—12歳までの心と脳の育て方』ダイヤモンド社
- 川崎市子どもの権利委員会(2008):『川崎市子どもの権利に関する実態・意識調査報告書』
- 田中道弘(2001):「自己肯定感尺度(Self-positivity scale)項目の検討(3)」『日本青年心理学会大会発表論文集』
- 伊藤美奈子(2019):「自己肯定感と生徒指導」『シリーズ生徒指導研究のフロンティア新しい時代の生徒指導を展望する』学事出版
- 不登校支援調査研究プロジェクト(佐賀大学・佐賀県教育委員会)(平成22年):『不登校支援のポイントと有効な手立て』
- 文部科学省(平成29年):「別添1 いじめの防止等のための基本的な方針平成25年10月11日文部科学大臣決定【改訂版】」『「いじめの防止等のための基本的な方針」の改定及び「いじめの重大事態の調査に関するガイドライン」の策定について(通知)』
- 高田明和(2019):『HSPとうつ自己肯定感を取り戻す方法』廣済堂出版
- 東京都教職員センター研修部教育開発課(平成24年):『平成23年度子供の自尊感情や自己肯定感を高める指導資料 自信 やる気 確かな自我を育てるために【発展編】』
- 大久保雅司・橋田浩・神宮寺聡・小宮山隆・相川恵子(令和元年):「『主体的・対話的で深い学びの推進』—生徒の自己肯定感を育む授業づくり・学校づくりを目指して—」『令和元年度山梨県総合教育センター研究紀要』
- 田村学(平成28年):「アクティブラーニングで目指す対話的な学びとは何か」『教職研修9月号通巻第529号』教育開発研究所
- 高垣忠一郎(2004):『生きることと自己肯定感』新日本出版社
- 東京都教職員研修センター研修部教育開発課(平成24年):『東京都教職員研修センター紀要第11号』
- 静岡県総合教育センター(平成26年):『自己肯定感を育てる授業づくり』
- 岸英光(2010):『「ほめない子育て」で子どもは伸びる 声かけをちょっと変えただけで驚くほど変わる』小学館
- 石田勝紀(2018):『子どもの自己肯定感を高める10の魔法の言葉』集英社
- 神谷和宏(2017):『子どもの自己肯定感UP コーチング』金子書房
- 梶田徹一(2017):「対話的な学習とは〈話し合い〉から〈対話〉へ、そして〈自己内対話〉へ」『教育フォーラム59対話的な学び アクティブ・ラーニングの1つのキープポイント』金子書房
- 中島輝(2020):「『自己肯定感が高まるノート』使い方ガイド」『日経WOMEN2020年11月号増刊・ミニサイズ版 通巻470号』日経BP©2020
- 永谷研一(2016):『1日5分「よい習慣」を無理なく身につけるできたことノート』クロスメディア・パブリッシング
- 佐賀県教育センター(平成30年):「あなたのよかところSAGAシート(自己肯定感チェックシート)」